トリガー・フラワー

湯浅なりゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トリガー・フラワー

【Ｎコード】
Ｎ５７２０Ｚ

【作者名】
湯浅なりゆき

【あらすじ】
この国には国家反逆罪という法律があった。国に反対した者、あるいはそう疑われる行動を取った者は、親族の連帯責任で逮捕され、最低でも無期懲役刑に処されることになっている。そんな、どこまでもくだらないこの世界に、五人の高校生がいた。彼らは将来に夢を馳せ、いつまでも続くであろう友情を享受していた。しかしその夢も、友情も、彼らが長い年月をかけて築きあげてきた牙城はたった一つの事件によって亀裂が入る。
五人の少年少女の、青春ＳＦストーリー。

一章・？（前書き）

キャラ名とルビ（必要な者は）を以下に羅列します。

・夏季（なつき）／本編ではナツキと表記。
・雄輔（ゆうすけ）
・美紀（みき）
・一ノ瀬香織（いちのせかおり）
・花咲紅葉（かざくれは）
・花咲萩乃（かざきはぎの）

です。
楽んでいただけると幸いです。全部で電撃文庫ページで１４６Ｐです。
見開きだと７８ページ分の量があります。お暇な時に、ぜひどうぞ。

一章・？

＊一章＊

ある日僕は、古本屋に行く機会があった。

この国で、一般人が見ることのできる本は限られている。たとえば左寄りに記述された国の歴史、それに伴う国家に批判的な書物、あるいは外国を異常に賛美した物語、などはすべて禁書と指定され、とうの昔に焼かれてしまったからだ。

どこかの国では、言論の自由というのがあると、同僚から聞いたことがある。そこでは国家反逆罪なんてものはなくて、党員なんてのも存在しない。それでいて全く革命などが起きないと言うのだから驚きだ。

そういうわけで、この国の言論統制は、当たり前だけど僕が今いる古本屋にも及んでいた。大量に並んでいる本の中に、前述した類の本は一冊も見られなかった。

だけど今回に限って、僕の目的はそれじゃない。

この夏の季節、肌を焼く暑い日差しを浴びていると、僕はふとその本が読みたくなる。

図鑑のコーナーに赴いて、目的の本を探す。

すると一分もかからずに、それは見つかった。

『花言葉全集』と、かわいらしいフォントの文字で彩られた表紙からして、本来男である僕が読むようなものではないのだろう。

だけど僕は迷いなくそれを手にとって、レジに持っていった。大きく、そして乙女ちっくな装丁の花言葉図鑑を買う僕を、店員は変な目で見ていたけれど、気にしない。

古本屋から外に出てすぐに、僕は重たい図鑑を開いた。鼻孔をつくのは、古本独特の、なんとも形容しがたい匂いだった。

目次に指を這わせ、すぐにその項目を見つける。そのページを開いた頃にはもう、僕の頬に一筋の汗が伝っていた。

そのページは、僕が高校生だった時に読んだものと、ほとんど変わらなかった。
ページの半分は花の写真によって占められていて、残りのほぼ半分にその花の開花時期や別称が記されている。
そしてページの一番下、そこにやっと、僕の求めている花言葉が書かれていた。

その言葉は、約束。

僕と彼女を結びつける、今もなお色褪せることのない、大切な約束。
あれは八月の中旬。夏の暑さも佳境に差し掛かった、今と同じ時期のことだ。
そう、確かあの日も今日みたいに日差しが強かった。アスファルトを照り返す陽光、地面にバケツいっぱいの水を打ち付ける小気味良い音、地平線の彼方で揺れる陽炎に、けたたましい蝉の鳴き声。
僕たちはいつものメンバーで、いつものように一ノ瀬の家に遊びに行って、そして――

「革命を起こすべきだと思う」
また始まった、と誰かが口にした。その声が耳に入らなかったのか、それともあえて知らぬふりをしたのか、ともかく天高く拳を突き上げている雄輔は、その口を黙らせることをしなかった。
「国家反逆罪という人権もクソもない不条理な法律のせいで、俺たちは日夜『党員』に媚を売って暮らし、いつ逮捕されるかわからない恐怖に怯えている。そんな状況を招いたのは俺たちだ。あいつらの言うことを鵜呑みにして、政治に無関心でい続けたからだ。このままじゃいけない。党員なんて連中に好き勝手させていたら、この国は遠からず滅びる。だから俺たちは、戦わねばならない！　今こ

そ、革命を起こすべきなのだ！」
雄輔は力強く熱弁して、グラスに並々注がれていたお茶を一気に飲み干した。からん、と氷がぶつかり合う音がして、直後に鉛筆がへし折れる音が続いた。
僕は恐る恐る顔を上げて、対面に座っている美紀の様子を窺った。彼女の拳から突き出ている二本の鉛筆。あれが元は一本の鉛筆だったことは、言うまでもない。
「ねえ、雄輔。あたしたちは今、なにをしているかわかってる？」
美紀は震える声でそう尋ねた。必死に堪えて声を抑えているようだけど、言葉の節々に怒りの色がにじみ出ていた。僕だけじゃなくて、ここにいるみんながそう思っただろう。たった一名を除いて。
「だから、成績が伸びない俺とナツキにお前らが勉強を教えてくれているんだろう？」
なんでそういうことをふんぞり返って言えるのか、甚だ疑問である。
「それが教えてもらってるやつの態度！？　わかってんの、あんた、あたしたちは今年受験なの。夏は受験生にとっての天王山、ここで怠けたら、絶対受かんないわよ！」
ついに美紀の堪忍袋の緒は切れてしまったようで、机を叩いて勢い良く立ち上がると、雄輔に食ってかかった。
「だから俺は受験などするつもりはないっ。旧体制をぶち壊す革命勢力の一員となる俺が、大学などという頭の固い保守勢力が巣食う場所に行くはずがないだろう！」
「それで就職できなかったら本末転倒でしょっ、自分の将来のこと、もっと考えろ！」
僕はため息をついて、ふと横を向いた。すると偶然、隣に座る紅葉と目があった。僕たちはお互いに苦笑すると、乱闘が始まった二人へと意識を向ける。
「ナツキはどっちが勝つと思う？」
美紀が雄輔の胸ぐらを掴み上げて、強烈なヘッドバットをかまし

ている光景を眺めていたところに、紅葉はそんなことを訊いてきた。
「美紀に百オンス」
「……オンスは重さの単位だよ？」
「えっ、うそ、オンスってイギリスの通貨単位じゃないの？」
「ポンドと勘違いしてるでしょ」
恥ずかしくなった僕は入れる穴を探したけれど、一ノ瀬の部屋にそんなのがあるはずもない。質素な部屋なのだ。女子高生と言えば、もっとぬいぐるみやアクセサリ、洋服なんかがあってもおかしくないはずなのに、すべてをベージュ色で統一された無駄にだだっ広い部屋には、必要最低限のものしか置かれていなかった。
僕たちはと言うと、一ノ瀬の部屋に置かれた長い座卓に各々の勉強道具を持ち込み、柔らかい座布団に腰を下ろしている。
ついさっきまで、一ノ瀬の家に来てから一時間は、みんな勉強に励んでいたんだけどなあ。
「み、美紀っ、暴力はやめろっ」
和を乱した原因は、このバカ、もとい雄輔にある。天然のくせっ毛で、いつも眼鏡をかけているその姿はどう見ても頭が良さそうなのに、実質はその逆、僕よりも成績が悪い。まともに勉強しているところを見たことがないから、当然の結果なんだけど。
しかしその分、スペースに余裕のある雄輔の頭には、大量のうんちくが詰め込まれている。サバイバル術だとか、本や芸術品だとか、他にも胡散臭い歴史、果ては未確認生物に関することまで、本当に様々だ。
それを調べる情熱を、ちょっとでも勉強に充てることができたら、少しは成績があがると思うのに。少なくとも、僕よりは成績が良くなるはずだ。
「口で言ってわかんないから暴力でわからせてやるのよっ」
美紀は長い黒髪を後ろでまとめた、いわゆるポニーテールの尻尾を揺らしながら、雄輔に腕十字固めを決めている。
いつもは周囲に威圧感を振りまいている持ち前の鋭い目付きも、

こういう時に限ってやんわりと緩めている。
なんだかんだ言って、美紀は雄輔をいたぶる、もとい雄輔とじゃれ合っている時を楽しんでいるのだろう。
「もー！　ちょっとあんたら、少しは静かにしてよ！」
雄輔と美紀が乱痴気騒ぎを起こしてやかましいものだから、こんな状況にも関わらず僕の左隣で黙々と教科書とにらめっこしていた一ノ瀬が、ついに声を上げた。集中力が切れてしまったのか、一ノ瀬は脱力したようにその小さな頭を座卓の上に突っ伏した。
茶色のショートカットが僕の腕にあたって、どこかくすぐったい。
ちなみにこの一ノ瀬香織が、僕たちが今いる家の主である。明るい性格でなによりも和を尊ぶ、僕らの中の盛り上げ役。彼女の存在は、僕らにとってとても大きい。
「だってこいつがまた変なこと抜かすから！」
「変なこととはなんだ訂正しろ！　お前は今、この国のために尽力する革命家たちを馬鹿にしたんだぞ！」
雄輔は美紀に三角絞めをくらいながらも、声を荒げてそう言った。なんでお前、その姿勢で普通に喋れるんだよ。バケモンか。
「あーもー、誰よこの二人も一緒に勉強しようって誘ったのはー」
「一ノ瀬だろ」「香織ちゃんだよ」
僕と紅葉で突っ込むと、一ノ瀬は顔を上げて髪の毛を掻きむしった。
「こうなることはわかってたのに、一昨日のあたしを殴りたい……」
一ノ瀬がそう呟いたのを聞きながら、僕は雄輔と美紀に視線を向ける。あいつらいつまで取っ組み合いやってるつもりだよ。
「そろそろ勉強に戻らない？」と、僕が静止を求めたのにも関わらず「だってこいつが！」「お前が寝技をかけなければすべて済むいだだだだだだ！」この調子である。
まあ、そんな二人を眺めながら笑っている自分も、嫌いではないというのが、本音。
雄輔がアホ抜かして、それを聞いた美紀が雄輔に突っかかって、

プロレスごっこを始める二人を、僕と紅葉と一ノ瀬で笑いながら眺めている、そんな光景。毎日のように繰り返される、この当たり前の光景を、僕はどうにも嫌いになれなかった。
だって、これは結果のわかりきったおふざけみたいなものだから。
最終的には雄輔も美紀も仲直り（そもそも喧嘩してないけど）して、それをネタに僕たちが二人を茶化す。そうして僕たちの間にはまた笑いが生まれて――その繰り返し。
でも、今日だけは違った。
それは、雄輔の一言がきっかけだった。
「革命革命って、じゃああんた、そんなこと本当にできるの？　無理に決まってるじゃない。馬鹿らしい」
「無理とはなんだ！　やろうと思えばなんでもできるっ、紅葉のお兄さんだって、この国のために――――」
「雄輔っ！」と、一ノ瀬は言下に雄輔の発言を遮った。雄輔も自分の失言に気付いたようで、狼狽を湛えながら俯いて、小さく「すまない」と呟いた。
そして当の本人である紅葉は、長くて艶やかな黒髪をふわりと浮かばせて、笑った。
それが無理矢理作り上げた笑顔であることは、誰の目にも明らかだった。
「大丈夫。わたしは気にしてないよ、雄輔君」
嘘だ。
僕は紅葉をずっと見てきたのだから、彼女が嘘をついたことくらい、すぐにわかる。
でも、その嘘は雄輔や僕たちに向かってつかれたものじゃない。彼女はいつもそうやって、自分自身を、騙すのだ。
「雄輔君が言ったことは本当のことだし、別になにを言われようと気にしないよ。それに、雄輔君はお兄ちゃんを庇ってくれたんだし、むしろ嬉しいくらい」
そう言われてしまえば、僕たちはもうなにも言えない。だから、

この話はおしまいだ。
例え紅葉のお兄さんが国家に対する反乱分子、いわゆる革命勢力の一員だとしても、僕たちにはなんの関係もない。周りの風聞なんて、知ったことか。
だって、紅葉は紅葉だ。
そのお兄さんがなにをしていようと、僕たちの友情がどうにかなるということは、絶対にない。
「っ……あ、あー、ほら、あの、あはは。なんだか変な空気になっちゃったね。ちょっと息抜きでもする？　ほら、うちゲームとかたくさんあるよ」
こんな時に頼りになるのは、やっぱり一ノ瀬だった。ぎこちない笑顔を浮かべて、テレビに繋がっているゲーム機まで膝立ちで向かう。一ノ瀬は身体を伸ばすようにうつ伏せになると、ピンと張った指先でゲーム機のスイッチを入れた。
うーむ、その体勢はちょっと際どい。あとちょっとでデニムのスカートの中が見えそう。
「ナツキ……どこ見てるの？」
途端に、僕の視界が真っ暗になる。ひんやりとした冷たさが瞼の上に伝わって、気付く。
紅葉が僕の目に手を置いているのだ。
「いや、その、別に、どこも」
「香織ー、ナツキがあんたのパンツ見たって！」
美紀のやつなんてことを。
「まだ見てねえよ！」
「まだ、ということは、見るつもりだったんだぁー」
見事なコンビネーションで、うまい具合にハメられた。アホか僕は。
「別にパンツくらい見せてあげてもいいけどー、ねえナツキ、あたしのパンツ、何色だった？」
一ノ瀬はコントローラーを引っ張りながら、再び僕の隣に腰を下

ろして、いじわるそうな笑みを浮かべて訊いてきた。しかしもうその手には乗るまいよ。
「わかるわけない。だって、僕は見てないし」
「いや、俺はわかるぞ。間違いなくピンクだな」
「なんであんたが知ってんのよ！」
立ち上がりざまに放たれた美紀のローキックが、座っていた雄輔の後頭部を貫いた。
ちらりと一ノ瀬に目をやってみると、自分のスカートの中を確認していた。
いやそこでするなよ。しかもちょっと顔赤らめてるし。
え、まさか図星？
「ど、どこで見たの？」
一ノ瀬は明らかにうろたえながら、頬を朱に染めている。その問いの対象は、美紀にキャメルクラッチを食らって床をひたすらタップしている雄輔に向けられていた。
「て、適当に言っただけなのだが」
「えっ」
素晴らしい自爆だった。そんなわけで一ノ瀬はますます頬を上気させて、ついにはコントローラーを僕に投げつけてベッドに潜り込んでしまった。
「パンツくらい見せてあげてもいいけどーとか言ってたのは」
「それとこれとは話がちがうのー！」
膨らんだ毛布の中から、こもった一ノ瀬の声が聞こえてきた。

かたやキャメルクラッチ、かたや狸寝入り。
僕は自然と、隣にいる紅葉と目が合って。
お互いに小さく、笑い合った。

一章・？

「結局、そこまで勉強できなかったね。なんのために集まったんだか」

一ノ瀬の家を出て、美紀と雄輔と別れ、僕と紅葉が二人だけ残される。

家がお互い近いのだ。だから僕ら二人だけは、中学から知り合った雄輔たちと違って、幼稚園の頃からの古い仲だった。

僕らはいわゆる幼なじみという間柄で、親同士にも繋がりがある。あんまり覚えてないけれど、紅葉とは一緒にお風呂に入るくらいには親しかったらしい。

こないだその話をなんとなく紅葉に振ったら、顔真っ赤にして「記憶を消してっ」と怒られた。当たり前だけど、そん時のことなんて全く覚えてませんからね？

「でも、最近はみんなで集まれることが少なかったよね。みんな受験勉強で忙しいし。だからこうやって一同に会すのも、息抜きってことで、わたしは良かったと思うな」

後ろに手を回して、僕の数歩先を行く紅葉がそう言った。

赤い夕暮れが紅葉を照らして影を作る。気になって時計を見ると、もう六時半だ。だというのに、辺りはこんなにも明るく、赤い。

紅葉の言葉を聞いて、僕はしみじみと実感する。そうだ、あと一月ほどで、夏が終わる。きっとそうなれば、僕たちが五人揃う機会は今よりもずっと減るだろう。

みんな、受験勉強で忙しい。

僕も、そのはずなのに。

「僕、大学行く意味あんのかな」

どうして大学受験に必死にならなきゃいけないのか、僕には理解できない。

美紀の言葉を借りるなら就職に有利だから？
就職もなにも、未来の展望なんて、なにも見えていないのに？
「たぶん、ほとんどの受験生がナツキと同じ悩みを抱えていると思うな。でも、そうやってなんとなく大学行って、気付いたら卒業して、大人になってる……こんな人、たくさんいると思うよ」
紅葉は空を見上げて、そう結びをつけた。
僕もつられるように空を仰ぐ。いつのまに上空を通り過ぎたのか、赤と青が混じり合ったような奇妙な色合いの空に一筋の飛行機雲が伸びていた。
あの雲を生み出した飛行機のように、僕たちの時間はあっというまに、気付かぬ内に過ぎていく。もう少し待ってくれればいいのに、と思う。早過ぎるんだよ、お前らは。いつも僕たちを置いてけぼりで、どんどん先に進んでいく。それに追いつこうともがくのがどれだけ大変か、少しはこっちの身にもなって欲しい。
「ほんと、ナツキは変態なことばっかり考えてるよね。今もどうせ、変態なこと考えてたんでしょ？」
「時間の速さと人間の生きるスピードは必ずしも同一じゃないんじゃないかって考えてた。哲学的だろ？」
「哲学的って言えばなに言っても許されると思ってるでしょ。意味分かんないよ、言ってること」
「うん。僕だって意味わかんない」
「ほんとに、変態なことばっか考えてるね」
「せめて変なことって言ってくれないかな。なんかその熟語は、胸が苦しくなる」
そうして、僕たちはまたしばらく無言のまま、帰路を歩く。
途中、僕はなんとなく頭に浮かんだ疑問を口にしてみた。
「ねえ、紅葉はどうなの？」
「なにがー？」
紅葉は白線の上から足がはみ出ないように気をつけて歩いている。子供みたいだった。

「いや、だから、将来のこととか」
そんな僕の質問に、紅葉はしばらく白線とにらめっこしていた。
そうして、やっと決意が固まったのだろう。足元の小石をつま先でいじくりながら、僕の問いに答えるために、その重たげな口を開いた。
「わたし、実は夢があるの」
紅葉はこちらに半分だけ顔を向けて、もじもじと両手の指先を弄んでいる。朱に染まっている彼女の表情は、恥じらいによるものなのか、夕焼けによるものなのか、僕の位置からでは良くわからなかった。
「夢？」
「うん。誰にも言ったことが、あ、ううん、先生には話した。あとお母さんと、お兄ちゃん」
お兄ちゃん。
僕はそのワードを耳にして、つい肩がぴくりと反応してしまった。紅葉にバレていないだろうか。そっと様子を窺ってみるが、どうやら杞憂だったらしい。
紅葉は続ける。
「だから、友達で話したのは、ナツキが初めて。嬉しい？」
「なんで僕が喜ぶんだよ」
無理矢理初めての人にこじつける必要があったのか？
「……もうっ、いい。それでね」
紅葉はふいっとそっぽを向いてしまった。そして一歩ずつ、ゆったりとした足取りで前に進んでいく。
「わたしの夢は、というか、わたしの志望学部は、医学部なの」
医学部？
紅葉が理系だということは、文系の僕とは選択科目でいつも別の授業なので、知っていた。でも、医学部なんてのは初耳だ。
「ってことは、医者になりたい、ってこと？」
医学部＝医者というのは、僕のあまりに安易過ぎる考えなのかも

しれないけど、たいていはそう思うだろう。
「もちろんなれればいいけど、それだけじゃなくて」
「なんだそれ。ていうか、確か紅葉って、血とかダメじゃなかった？」
小学生くらいの頃、僕がアスレチックから落ちて頭を酷く擦りむいた時、だくだくと溢れ出る血を目にして、僕よりも先に紅葉が気絶してしまったくらいだ。
「うん……でも、とにかく、やりたいの」
その一言には、とても強い意志がこめられているような気がした。だから僕はつい、訊いてしまう。
「なんで、そんな」
なんで、そんなに必死になってるの？
あまりにも無粋で愚かな、僕が途中で言い淀んだ質問を、紅葉はどうやら別に意味に解釈したようだ。
「危なっかしいの。そそっかしくて、平気な顔して危ないことばっかして、いつも心配させられる。だから、怪我して帰ってきた時も、わたしが医療を学んでたら、冷静に対処してあげられるから、それがひとつめの理由」
誰のことを言ってるんだよ、と僕は口を挟もうとした。
でも、それよりも早く、紅葉は続きを言ってしまう。
「もうひとつが、かなり打算的なんだけど、もし医者になれればお金がたくさんもらえるから。そうすれば、なにかあった時に、わたしが養ってあげられるでしょ？」
紅葉はこちらを振り向いて、笑顔のままで訊いてきた。
「でしょ、って……そもそも誰に言ってるんだよ」
僕の発言を、紅葉は笑った。やっぱり鈍感だね、そう呟いて、紅葉は再び前を向いて歩き出してしまう。
「それくらい教えてくれたっていいじゃん」
なんだか蚊帳の外にされたみたいな、変なモヤモヤで気分が悪かった僕は、ついむきになって言及してしまう。

だけど紅葉は、なぜかご機嫌な調子で歩みを進めながら「教えてあげないっ」と楽しげに言うのだ。やけにテンション高いし、意味がわからない。
「まあ、いいけど。僕にはどうせ関係ないだろうし」
そう言って、気付く。
別れの時が来た。僕と紅葉は、この曲がり角で別々になる。そうは言っても、お互いの家まで歩いて五分もかからないのだけど。
「ねえ、ナツキ」
曲がり角に差し掛かって、紅葉はようやく歩みを止める。すでに空は暗くなり始めていて、夕焼けは西の地平線に沈んでいってしまった。
ぽつり、ぽつりと、等間隔に設置された街灯に光が灯されて、僕たちを照らす。耳を澄ませばどこかの家から子供の笑い声やテレビの音が漏れ聞こえてくる。どこからともなくそよ風が吹いてきて、夏のにおいをたくさん運んできた。
それらはすべてごちゃまぜになって、僕たちのいる場所を温かく演出してくれる。
なんだか僕は照れ臭くなって、視線を泳がせてしまう。なんだよ、早く言えよ。
「わたしの夢は、それだけじゃなくてね」
紅葉は、踵を軸にくるりと回転して、僕の方を向いた。ふんわりと、黒い髪が柔らかく宙を舞った。
艶やかな黒髪に反射する街灯の光が、僕の目には儚い星屑のように映った。
「みんなと一緒に……ずっと、ずっと一緒にいられることだよ」
そう言って、紅葉は街の暗闇に消えていった。
みんなと、一緒に。
なにを、当たり前なことを。
「僕だって、そうだよ」
みんなだって、同じさ。

だからきっと、大丈夫。
僕たちはいつまでも一緒で、ずっとバカやってられる。
みんながそう思い続けている限り、紅葉の夢は叶う、って。

そう、思ってた。
そんな夢物語を、僕はこの時は本気で、思っていたのだ。

二章

みんなで勉強会をしてから、もう二週間が経った。来週には二学期の授業が始まり、受験ムードで鬱屈としたクラスメイトと共に過ごす日々が再開される。

この二週間、みんなは勉強をしていたのだろうか。僕はと言えば、たまに机に座っては携帯を開き、ラジオを聴き、息抜きと言いつつも二時間くらいインターネットに没頭するという受験生にあるまじき堕落した生活を送っていた。アホか僕は。

そうして今日もまた、いつものようにラジオを付けながら参考書を読み、どちらかというとラジオから流れてくる音楽に耳を傾けていたところに、僕の携帯が一件のメールを受信した。単調な、デフォルトの受信音が鳴り響き、僕は片手間でその内容を読んだ。

『緊急、今すぐN神社に来い』

へたった誘蛾灯が照らす仄暗い真夜中の街道を、僕は自転車で滑走する。ペダルに力を入れて小さな坂道を何度も上り、額に汗を滲ませながらもなんとか目的地に到着した。

腕時計を見て時間を確認する。夜中の一時、この時間帯はいつも携帯端末のラジオで音楽を聞いているので起きてはいるが、滅多に外出したことはなかった。

僕は自転車から降りると、空を見上げた。

まんまるい月が頭上で輝いていて、その下には木造の建物がある。僕がいる場所からずっと石段を登った先にあるその建物は、とうの昔に神様を失ってしまった社だ。

僕を待ち受けるこの真っ赤な鳥居も、今じゃただの門でしかないし、この神社に祀られている御神体も、ただの巨石以外になんの意味も持たない。

この世において、神様は二人も必要ないからだと言われている。
それでもこの辺りの人たちの中には極稀に、このオンボロ神社にこっそりと参詣しに来ている人もいるらしい。
お賽銭をして鐘を鳴らし、両手を打ち鳴らし祈願する。そんな姿がもし党員に見つかれば、最悪逮捕されてしまう可能性もあるのに、だ。
ともかくそんな危険な場所に、どうして僕は訪れたのか。
僕は携帯電話を開き、受信ボックスにある一通のメールを確認する。
それは、雄輔からのものだった。
『緊急、今すぐN神社に来い』
正直かなり迷った。メールが届いたのがすでに夜中の零時過ぎだし、寝たフリでもしてやり過ごそうかとも考えた。
でも、そのたびに今日紅葉に言われたことを思い出し、結局僕の良心は屈してしまった。
これでくだらなかったら、あいつぶん殴ってやるからな。
僕は石段に足をかけ、ゆっくりと、一段一段を踏み締めながら登っていく。
石段の両端には、鬱蒼と茂る杜がずっと伸びていて、そこからはコオロギの鳴き声などが聞こえてきた。風が吹くたびに茂みがざわざわと音を立て、不気味な雰囲気が辺りを覆い尽くしている。
なにせ明かりがないのだ。携帯のディスプレイから発せられる唯一の光源で足元を照らし、石段を踏み外さないように注意する。
暗闇が怖くなってきた僕は、何度も後ろを振り向いた。携帯で雄輔に電話をしてみたものの、出る気配はない。
びくびくしながらも、やっとの思いで参道にたどり着いた。
辺りを見回してみるが、やはり雄輔の姿はない。
「……おーい、雄輔、いないのか？」
小さな声を出したつもりだったのだが、あまりに周りが静かすぎて、かなり響いてしまった。しかしそれでも返事はない。

僕は参道を歩き出し、木造の拝殿へと向かう。
途中、濁りきった雨水がたっぷりと張った手水舎があった。整備がされていないので、湧き水が流れる道が塞がってしまったのだろう。
ぽつぽつと、他にも木造の背が低い建物がいくつも見られた。そのどれもが度重なる豪雨や降雪や台風などで半壊状態だ。何年間、このまま放置されていたのだろうか。もしもこれらの建物がきれいなままだったら、きっととても美しかったのだろうなあと思って、なんとなく寂寥感が胸を打った。
参道が途切れていて、そこからは一面に真っ白な砂が敷き詰められていた。
真砂を踏む音だけが辺りに響き渡る。拝殿はもう目の前にあった。すでに目が慣れてきていたので、明かりがなくても視界は良好だった。
拝殿の前には賽銭箱が置かれている。いくらくらい入ってるのだろうか。ここにお賽銭を入れるなんてことをしてたのはずっと昔のことだろうから、たぶん中には枯れ葉とかしかないだろう。
とか思いながら賽銭箱に近づいていくと、驚くべきことに気付いてしまった。
なんとこの賽銭箱、ど真ん中にぽっくりと穴が開いているのである。
「……賽銭泥棒？」
僕は屈んで、真っ黒な穴の中を覗いてみる。なにもない。まあ、もしこれが賽銭泥棒の仕業だったら、当たり前だけど中身は持って行かれているか。
バチあたりなやつだなあ、僕はやってませんよ、と心の中で神様に言い訳をしておく。
そうして頭を上げて拝殿に目をやると、またしても驚愕の事実を発見した。
拝殿の入り口に貼られてあったと思われる木板の壁が、見事なま

でに破壊されていたのだ。なんだこれ誰がやったんだ。廃れていて誰も寄り付かないとは言え、さすがにやり過ぎな気がするぞ。
僕は拝殿の昇ると、携帯の画面をライト代わりにしながら、中へ入っていく。ここまできたらもうやけくそだ。すでに僕の好奇心・探検心には火が灯されてしまった。
拝殿の中は腐った木のにおいが充満していて、僕は咄嗟に口元を覆った。歩くたびに木張りの床が軋むので、いつか床をぶち抜いてしまうのではないかと心配する。
小さな光源だけで暗闇を突き進むと、目の前に引き戸が現れた。携帯を片手に、もう一方の手で戸を引いてみるが、開く気配はない。
力が足りなかったのかな。もう少し力を込めて引っ張るが、やっぱり開かない。押してもびくともしないので、木が古くなって扉として機能しなくなっているのかもしれない。
ここまでか。
そうして僕が一歩下がって、踵を返そうとしたその瞬間。

「どいてろナツキっ！」

背後から、そんな叫び声が聞こえてきて。
直後、わけのわからない雄叫びと共に僕の隣をなにものかが通過する。
そして、そいつは手に持っているなにかと一緒に、周りの壁ごと拝殿の扉をぶち抜いた。
がらがらと、木が崩落する音と共に、周囲には埃が蔓延する。僕は何度も咳き込むと、ダストで埋め尽くされた真っ黒な視界の中、うっすらと目を開けてみた。
まだもくもくと埃が上がり続けている。さっき一瞬だけ垣間見たあの人影は、どこにもいない。いない、が、そいつが誰なのか、なんとなく予想はつく。
さっき聞こえてきたあの声、あの絶叫、どこかで聞き覚えがある

のだ。いや、聞き覚えがあるなんてもんじゃない。僕はほぼ毎日、あいつの演説を聞いている。うざったくてこの上ない、僕をここまで呼び出した張本人。
「雄輔、なのか？」
僕の声に呼応して、再び木が倒れる音が鳴り響く。でかい穴の開いた扉の下で、人と同じくらいの長さを持つハンマーの上に倒れている人影が見えた。そいつは呻き声を上げながら緩慢な動きで立ち上がると、埃を払いながら僕の元へやってきた。
「よく来てくれたな、ナツキ。待っていたぞ」
暗闇の中でもよく目立つ銀ぶちの眼鏡が、そいつが雄輔であることを象徴していた。
あんなことして、なんで平然としていられるのだろう。痛覚ないんじゃねえの、こいつ。
「待っていたぞって、なに、なんでこんなことしてんの？」
辺りに立ち込めていた埃は、会話するのに支障がないくらいには落ち着いていた。
「なにって、決まってるだろう。探検だ」
いやそんな真顔で言われましても。
「革命を起こすには武器が必要だからな。調達しに来た」
「調達って、ここになんかあるの？」
「知らん。だが、この辺りであたっていないところとなると、もう残るはここしかない。神社だぞ、もしかしたらパンツァーファウストとかあるかもしれん」
ねえよ。なんで神社にロケット砲が置いてあるんだよ。
「で、なんで僕を呼んだの？」
「愚問だな。ならばお前は、一人でカノン砲を運べるか？」
「わかった。その武器とやらがひとつも見つからなかったら、僕はお前を殴る」
上等だ、と高らかに笑いながら、ハンマーを拾った雄輔はぶち抜いた扉をくぐる。僕も雄輔の後に続いて奥へと進み、細い通路を渡

った先で、またしても扉に突き当たる。
「開かないな。下がってろ、ナツキ」
「ほとんど確信してるけど、一応訊く。賽銭箱とか、この拝殿の入り口をぶち壊したのって」
「俺だ。こいつを――」
放物線が描かれて、雄輔の持っていたハンマーが通路の扉を木っ端微塵に破壊する。
「――使ってな」
天井から埃がぱらぱらと落ちてくる。いつかこれ、天井ごと落ちてくるんじゃないかな。雄輔と二人で、こんな誰にも発見されないような神社で死ぬなんて絶対にごめんこうむりたい。
「これって犯罪じゃないの？」
「ははは。校則は破るものだと嘯いて、髪を茶色く染めたお前が法律を破れないとでも？　似たようなものだろう」
桁がちげえよ。
「そうだ。なんで俺がこの神社に武器があると言ったか、わかるか？」
歩きながら雄輔が訊いてきた。
僕は素直に首を振った。わかるわけがない。むしろ、理由があったこと自体驚きだ。
「この神社は先の大戦の初期、軍人の寮として使われていたそうだ。ここからだと海も近いし、すぐそばに基地もあるからな。だから、俺はここに最後の望みをかけた」
そんな本当か嘘かもわからないさもありそうな話をして、雄輔は意気揚々と奥へ進んでいってしまう。
置いてけぼりをくらうのも嫌だったので、僕は仕方なく前を歩くその背中を追った。
一歩進むごとに、神様に呪いをかけられているような気がしてならない。
「だからって、そのまま武器が放置されてるわけないじゃん」

「わからんだろう。軍人がここで寝泊まりをしていたんだ。銃や、剣がざくざく見つかるかもしれ……お」
雄輔の足がぴたりと止まった。
見てみると、雄輔の目の前には大きな四角形の物置きがあった。だけど物置きの扉は例のごとく開かないので、またしてもハンマーが振るわれた。
「本当にバチがあたるって」
「バチが怖くて革命なんかできるか。俺たちがやり遂げねばならないのは、『神様』に対する反逆なのだから」
雄輔はそんな屁理屈を言って腰を屈めると、物置きの中を漁り始めた。
一歩下がってその光景を眺めている僕にさえ、物置きにはさまざまな物が入っていることがわかる。お祭りかなんかに使うような道具から、掃除用具まで。
でも、ここに武器が入っているようには思えないけど――あれ。
「ちょ、ちょっとどいて」
僕は慌てて雄輔を横へやると、物置きの中にあった小さな箱を手に取った。
そう、これだ。さっき見ていて、なんだか周りの物とは一線を画すような違和感を持っていた、檜（ひのき）の箱。
外見は、いたって普通の箱だった。大きさはちょうど両手で持てるくらいで、ずっしりと重みがある。
「なんだそれは」
僕にもわからない。
でも、なぜか、手に取ってしまったのだ。
「早く開けろ」
雄輔に急かされるままに、僕はその箱を床に置いた。こうして見ると、その違和感はより顕著に思われる。
なにがおかしいのかは、やはり自分でもわからない。でも、僕がその箱に手を伸ばせば伸ばすほど、その違和感は強くなっていき、

次第に恐怖へと変わっていった。
息を飲む。ただの箱を開けるだけなのに、どうしてこんなにも緊張しているんだ。
「……開けるよ」
いやだった。今すぐにでもこの箱を雄輔につきつけて、僕の代わりに開けてもらいたかった。でも、それを僕のくだらないプライドが邪魔をする。
僕の手が、箱の淵に触れる。全身が粟立って、心臓が弾けんばかりに暴れだす。
落ち着け、自分にそう言い聞かせて、僕は。
重たい箱の蓋を、ゆっくりと慎重に、開けた。

どちらが先に声を漏らしたのかは、定かではない。
でも、蓋を開けた瞬間の高揚感は、いまでも鮮明に思い出すことができる。
そこには、武器があったのだ。
檜造りの箱の中には、真っ白な布で優しく包まれた、一丁の拳銃があった。
名は、十四年式拳銃。
それが、僕たちの人生で初めて手に入れた、小さいけれどとても重たい、武器だった。

三章・？

その日僕は、紅葉の家に遊びに行くことにした。一応体裁を整えるために、勉強でわからないところがある、という言い訳を使ったわけだが、紅葉は二つ返事で快諾してくれたので、なによりだった。

もう、家にいるのが辛かったのだ。

なぜなら現在僕の部屋には、正確には僕の部屋のベッドの下には、つい数時間前に手に入れたあの木箱があるのだ。中には、十四年式拳銃とかいうけったいなものが入っている。

なんでそれを僕が持っているのか。話は、この銃を見つけた時まで遡る。

「これはお前が見つけたのだから、お前が持って帰れ」

「絶対にやだ」

僕と雄輔は真夜中の廃れた神社の本殿で、間に木箱を置いてお互いに睨み合っていた。

雄輔の予想通り、この神社には武器があった。雄輔曰く、これは十四年式拳銃という、先の大戦でこの国の軍に採用されていたものらしい。

角張った銃身に、細い銃口、全体は闇のように真っ黒な銃だった。

僕の正直な第一印象は「まるでおもちゃのようだ」。最近のエアガンの方がよっぽどリアリティがあると思ったくらいだ。でも、グリップに付着した汚れや、銃口の先端が薄い灰色に染まっているところを見ると、これが紛れも無い実銃であることを確信した。

僕は、こんなのずっと眺めてるだけでも嫌だった。暴発してしまうのではないかとびくびくして、触ることすらできない。

だから親切で臆病な僕は、これを求めていた雄輔に譲渡してやろうとした。

なのにこいつは。
「革命家を志す者として、やはり他人の手柄をもらうわけにはいかないだろう。だからほら、お前が持って帰れ」
頑なにこの銃をもらおうとしないどころか、木箱にすら触ろうとしない。
「びびってんの？」
率直に、訊いてみる。
「は、はっ？　び、びびるって、お前、そんなわけないだろう。ただ俺は、お前のものを無理矢理奪おうという気は毛頭ないというだけで」
雄輔が僕から目を逸らし出した。嘘が下手なやつである。
「そもそも、この銃撃てるの？　弾入ってるの？　僕じゃわかんないから、雄輔、ちょっと確認してみてよ」
雄輔の方に木箱を押す。
「ばっ、ばかやろぉう！　試し撃ちなんて、できるわけないだろうっ！」
僕の方に木箱が戻ってきた。
「いやいや、じゃあ弾が入ってるか確認するだけでいいからさ」
再び雄輔の元へ押し返す。
「入ってるよ。入ってる入ってる。だからほら、こっちやんなよもうっ！」
またしても僕の方に銃が戻ってくる。
「びびってんならびびってるって言えばいいだろ！　僕はびびってる！　ほら、じゃあ雄輔は？」
僕が木箱を再三押し返そうとすると、それを力強く雄輔が止めてきた。
「びびってなどいない！　お前は本物の銃の危険性がわからないからそう言うんだ！　いいか、こいつが本物だったら、暴発するかもしれないんだぞっ！」
「だから僕は持って帰るのは嫌だって言ってんの！　ていうか、そ

れならよっぽど雄輔の方が適任じゃないか！　雄輔は、その危険性を把握してるわけだろ？」
木箱を押す力を強める。雄輔も負けじと応戦してきた。
「わかった！　もういい！　俺はびびってる！　びびってます！はい言った。言った。だからお前が持って帰れ」
「小学生かてめえは！　僕だって怖いつってんだろ！」
木箱がみしみしと音を立てている。このままじゃ木箱が壊れてしまう。僕たちは互いにそれを悟って、木箱を押す力を緩めた。
「わかった。じゃあこうしよう。ジャンケンだ」
雄輔はすでに腕をくるくると回し、やる気十分だった。すっかり開き直っているのがまた一段とむかつく。
「あのさ、そもそもここに置いておくってことはできないの？」
僕はふと、思ったことを口にした。そもそも、わざわざ持って帰る必要はないのだ。どうせ持って帰ったところで、使わない。じゃあ、ここに放置しておいた方がいい――
「却下だ」
――という僕の案を、雄輔は言下に撥ね付けた。
「……なんで？」
「お前のためになるからだ」
意味がわからなかった。僕のためになる？　なにが、どうして？
「銃は人を殺すだけの道具じゃない。牽制にも使えるし、自らの戒めとしても有効だ。だからこそ、この銃はお前が持つべきだ。俺ではなく、お前が」
「なんかかっこいいこと言ってるけどさ、ぶっちゃけ言い訳でしょ」
雄輔はしばらく唸り声を上げて、あきらめたようにため息をついた。
「わかった。じゃあ、妥協しよう」
そう言いながら、にやけ面を浮かべている雄輔はポケットから携帯を取り出した。タッチパネルを操作して、なにやらアプリを起動させたようだ。

携帯端末から、テレビの砂嵐のような音が流れてくる。
「なにそれ？」
「妥協だ」
そして数秒後、ノイズはぷっつりと途絶え、聞こえてきたのは、なんと驚いたことに僕の声だった。
『――まあ確かに、紅葉とは十年以上の付き合いだけどさ』
続いて聞こえてきたのは、雄輔の声。
『それじゃあ、一切恋心はないと？』
『……ん、ないって、わけじゃないけ――「あああ

ぴっ、という電子音に引き続いて、本殿に雄輔の声が響き渡る。
「それでいい」

と、まあこんな感じで僕が持って帰るに至った。ほんと、あいつ友達を脅すとかどうかしてる。そもそもなんで僕あいつと友達なんだっけ。わからなくなってきた。
「絶交してやろうかなこんちくしょう」
「だーれと？」
「うわっ」
いきなり真横から呼びかけられたため、素っ頓狂な声を上げてしまった。驚きながらも声のした方を見ると、そこにはなんだか、やけにダサい格好をしている紅葉がいた。
軍手をして、鳶職人みたいなだぼだぼのズボンを履いている。上はワイシャツ一枚で、いつも以上に胸が強調されている気がしなくもない。
「なに、ジロジロ見て……って、あ、ああっ、ちょ、ちょっと待って！　これ今、その、お花の世話してたから、とにかく、そこで待ってて！」
僕の視線に気付いたのだろう。紅葉は顔をいつかの夕焼けのように真っ赤に染め上げて、慌てて家に戻って行った。
つーか、先に行くって連絡しといたんだから、用意くらいしておけばいいのに。
僕は石造りの門柱に背をもたれて、携帯をいじる。直射日光が頭上から降り注いで、とにかく暑い。
「花の世話、ねえ」
僕は門を抜けて、勝手に紅葉の敷地を跨いだ。
素朴な、だけど趣のある紅葉の家は、幼稚園からの付き合いである僕にとっても馴染み深かった。あいつのお母さんとか、たまにお兄さんとも遊んでもらった覚えがある。

今じゃもう、そのお兄さんに会うことはないのだけど。
僕は古びた木造建築の家をぐるっと周り、庭にたどり着いた。広々とした空間で、庭だけで僕の家の敷地面積くらいある。ここに家を建てて済ませて欲しいと思うくらいだが、残念ながら、先客がいるのだ。
僕の目の前にあるのは、大きな温室。これを一個人、というか一家庭が持つのはなんだか異常な気がするが、元々紅葉のお母さんは菜園が趣味だったらしく、それを理解していた紅葉の、もう亡くなってしまったお父さんがいろいろ計らってくれたと言う。
薄いスモッグがかかっているビニールは、目を凝らせば中の様子を窺うことができる。中にはなんだか見たこともない花ばかり咲いていた。
温室の中以外にも、庭のそこら中に咲いている花が見られた。名前を知ってそうな花と言えば、ひまわりくらいしかない。太陽の光を全身に浴びながら、ひまわりは気持ちよさそうに茎を揺らしていた。それにしてもでかい。僕の背丈くらいはある。
「なんで勝手に人ん家の庭に入るかなー」
僕がひまわりと背比べをしていたところで、背中に紅葉の声がかかった。
服装はカジュアルなものに変わっていた。髪の毛も、ちらほら枝毛が跳ねているけれど、それでもさっきに比べれば幾分もましになっていた。
「いいじゃん。もう何回も遊びに来てるんだし」
「そういう問題じゃないよ！」
家族みたいなものだろ、と言おうとして、止めた。
それはちょっと、あまりに小っ恥ずかしすぎる。
「花の世話って、これ？」
僕はビニールの温室を軽く叩く。
「うん。お母さんが、ちょっと、今いないから、代わりにわたしが世話をしてるの」

「今お母さんいないんだ。パート？」
「え、あ、ん……い、いいじゃん別にっ。ほら、わかんないところあるんでしょ？　教えるから、上がって」
紅葉は僕の質問を曖昧にごまかして、庭から縁側に上がろうとしてしまう。
でも、そこで僕が見た紅葉の背中は、どうしてかわからないけれどやけに寂しそうだった。僕を置いてどこかへ消えて行ってしまいそうな危うい儚さが、その背中に表れていた。
だから僕は、ほぼ無意識にその背中を呼び止めていた。
「なに？」
紅葉が振り返る。僕の疑念は確信に変わる。ああ、こいつは、なにか隠している。いつもみたいに自分に嘘をついて、自分を騙しているのだ。
「手伝うよ」
「えっ？」
紅葉が首を傾げる。
「だから、花の世話。やったことないけど、教えてくれれば、いないよりはましだと思うから」
そうして僕は、勝手に温室に入って行った。ひんやりとした空気が肌を撫でる。外はとても暑いので、かなり居心地が良かった。もうずっとここにいたい。冷房がぶっ壊れて扇風機しかない僕の部屋よりずっと素晴らしい空間じゃないか。
「もー、勉強しに来たんじゃないの？」
「いや、いいからさ、紅葉。僕これからここに住む。花のついでに、僕も世話してよ」
なんとウッドデッキまで完備されている。きちんと手入れにされているから、虫の一匹も見当たらない。しかも夏は涼しいし、どことなく良い香りが漂っている。
僕はウッドデッキに腰を下ろすと、そのまま仰向けに寝転んだ。
「ねえ、なんでさっきからそんなに自由なの？」

「紅葉の家だし」
「わたしも美紀ちゃんみたいに格闘技やってればなー」
なにをするつもりなのか。想像するのもおぞましい。
「冗談冗談。で、僕はなにすればいいの？」
紅葉はしばらく僕をジト目で睨みつけてきて、それからがっくりと肩を落とすと、同時に大きなため息をついた。言葉を介さずに、こんなにもひしひしと気持ちが伝わってくるなんて。どこまで露骨なんだ。
「じゃあ、外のひまわりに水上げてきて」
「えっ」
涼しい温室を追い出された僕は、早々に自分の発言を後悔していた。

三章・？

日焼けした。首筋がちりちりと痛む。僕はうちわを扇ぎながら、紅葉の部屋でだらけていた。

ホース片手にひまわりに水を上げるだけで疲れ切っていた僕に、紅葉はさらなる雑務を命じた。庭の草むしりである。何度熱中症で倒れかけたかわからない。むしっているのが草なのか、雄輔の天パなのかすら、わからなくなってきていた。幻覚も見え始めて、僕の体力に限界が近付いてきた頃になって、大天使紅葉さまが冷たい水を差し入れてくださった。奴隷の扱い方を心得ているやつである。

そんなこんなで、ついに草むしりを完遂した僕は、紅葉の部屋に上がると同時にダウンした。腰の骨が砕けたかと思った。足はもう、棒になって動かない。

「お疲れー。ほんとに全部やってくれるなんて思わなかったよ！」

紅葉がお菓子とお茶を持ってきてくれた。僕はすぐにそのお茶を飲み干すと、再び床に寝転がった。

「もう無理。もう勉強とか無理。僕の脳みそも筋肉痛になった」

「ナツキの脳みそって筋肉あるの？」

「頭痛が痛いってこと。腹痛も痛むし、馬に乗馬したり徒歩で歩いたりしちゃうんだ」

「うわぁ、重症だね」

僕は起き上がって、お菓子をつまむ。和菓子の仄かな甘みが口いっぱいに広がって、少しずつ疲れも癒されてきた。

「はー。ほんと、久しぶりに運動した気がする」

「でも、本当に助かったよ。ありがとう、ナツキ」

唐突に、紅葉からそんな真っ直ぐな感謝をされてしまった僕は、面食らってあきらかに動揺してしまう。

なんだよ、くそ。調子狂うなあ。

「……そ、そういえば、また増えたね」

とにかく意識を逸らそうと、僕は話題転換を試みる。
「増えたって、なんのこと？」
紅葉の疑問に、僕は顎で答えた。それは、紅葉の部屋の窓際に並べられている、いくつもの小さな鉢植え。色とりどりの花々が、部屋の雰囲気を一段と明るくしていた。
僕が以前来た時は、鉢植えが三つだった。でも今日は、四つある。
「あ、あー。うん、そう、きれいでしょ」
「なんて花？」
三枚の大きなオレンジの花弁があって、中心の辺りには赤い斑点がいくつもある。初めて見るような花だった。茎がピンと伸びていて、なんとなくかっこいい印象を受けた。
「……知りたい？」
「隠すようなことなの？」
「いや、ううん、そうだよね。これは、えっと、チグリジア……和名が、トラフユリって言って、ほら、真ん中の斑模様が、虎みたいでしょ？　そこから付いた名前。英語だとタイガーフラワーって言うの」
「ちょ、待ってよ。いくつあるの名前。覚えられない」
一番最初、なんだ、ち、チグジア？　タイガーフラワーだけは覚えたけど。
「もう、いいでしょ。この話はおしまい」
そう言って話を終わらせると、紅葉はベッドに腰を下ろした。
どうして紅葉がこんなにも花の話題をしたがらないのか。
それはとっても単純で、至って女の子らしい純粋な理由。
部屋に飾ってある花には紅葉の願いが――いや、これらの花がまるごとぜんぶ、紅葉の願いそのものなのだ。
紅葉の性格は十年前から、ほとんど変わっていない。今が子供っぽいんじゃなくて、紅葉は小さい頃から妙に大人染みていたのだ。
思いっ切りガキだった僕の面倒を見てくれていたからなのかもしれない。

小学生まで、紅葉は僕のお姉ちゃんみたいな存在だったのだ。
もちろん、それは今になって思うだけで、当時はむしろ、おせっかいな幼馴染み程度にしか認識していなかっただろう。
そんな紅葉は、小さい頃から不安や悩みを誰かに言おうとしなかった。誰かに自分の愚痴を吐露することは、その誰かに迷惑をかけることと同じだと思い込んでいたのかもしれない。
それは確かに、処世術としては立派なものだ。変ないざこざは起きないだろうし、誰かに心配をかけることも、面倒を押し付けることもない。
だけど、紅葉のそれは度を越していた。歳が二桁になる前からずっとそんな調子なのだから、周りにいる僕たちは逆に心配をしてしまったくらいで、むしろ本末転倒だ。
それでも紅葉は自分の不安を、悩みを言おうとしない。いつか爆発するんじゃないか、そんなことを僕の母と紅葉のお母さんが話していたことを聞いたことがあった。
だけど紅葉は、ちゃんと自分で発散していたのだ。ばかばかしいけどとっても微笑ましい、純粋過ぎる方法で。
例えば、ガーベラ。花言葉は「辛抱強く」、あるいは「希望」、あるいは「常に前進」。
例えば、クロッカス。花言葉は「私を信じて」、あるいは「愛したことを後悔する」。
例えば、ダリア。花言葉は「不安定」、あるいは「優雅」、あるいは「移り気」。
とにかく紅葉は、花に自分の思いを込めた。ずっと昔、僕が紅葉の家に遊びに行った時に、小学生だった彼女は窓際に置いた花に向かって、小さな声で呟いていた。よく聞こえなかったけど、それが彼女の願い、あるいは悩みだったことは、僕にもわかった。
そんな願掛けみたいなことが、ずっと、十七になった今でも続いている。
十年以上一緒にいる僕が、これに気付いていないとでも思ってる

のか、紅葉は。
僕はここに新たな花が飾られると、つい胸を痛めてしまう。
だって、そうだろう？
「いやなことがあるなら、少しくらい僕を頼ってくれたっていいのに」
そう思うのは当然のことだ。
僕と紅葉は、ずっと、ずっと一緒だったのだから。
「えっと」
だけど紅葉は、僕を頼ってくれない。自覚はしている。僕がそういうのに足る男じゃないってことくらい、わかってる。
「あの、その」
でも、やっぱりそれは、悲しすぎるだろう。
僕らは、幼馴染みなのに。
僕は紅葉のことを、こんなにも心配しているのに。
「な、ナツキ？」
「うん？」
呼ばれて、僕は顔を上げた。つい自分の世界に没頭してしまっていたようで、紅葉と同じ部屋にいるということをすっかり忘れていた。
紅葉の顔を見ると、なんだか鳩が豆鉄砲くらったみたいな表情をしているではないか。
「どうしたの？」
「どうしたのって、今、ナツキなんて言ったの？」
「……どうしたの？」
「だからそうじゃなくてっ」
紅葉は手をばたつかせて、僕に詰め寄ってきた。
眼の前に、紅葉の小さな顔がある。香水でもつけたのか、若干良い香りが漂ってくる。
「僕を頼って、とか、なんとか、その」
「……ん？」

あれ。
なんで僕が考えていたことを、紅葉が知っているんだ？
自問自答するまでもなかった。僕は咄嗟に俯いて、紅葉から目を逸らした。
「ま、まさかとは思うけど、その、僕、声に出てた？」
「……うん。ばっちり」
「マジか」
「マジ」
恥ずかしさのあまり僕は顔を上げることができなかった。僕を頼れ、なんて歯が浮くような台詞、普段だったら言えるはずもない。僕、舌に油でも差したかな。
でも、どうするべきだろう。
いつもの紅葉なら、ここですぐさま「いやなことなんてないよ」と僕に遠慮しそうなものだけど、今日は違う。僕は頭を上げていないから紅葉の顔色を窺えないけれど、彼女は今も黙りこんだままだ。
待っているのか？
僕の、言葉を。
「……あの、さ」
そうだ。ここまで来たなら言ってしまえ。なにを恥ずかしがる必要がある。僕がその願いに足る男かどうかは、後で判断すればいい。もしなんともなければ、僕が恥ずかしい思いをしただけで済む――いや。
なんともないわけ、ないだろ。
紅葉は困っているんだ。なにか、悩み事があるんだ。だから今日の紅葉は少しおかしかった。僕は紅葉の家に遊びに行く旨を事前に伝えといたはずなのに、紅葉はそれを忘れて家着だった。それに僕が紅葉のお母さんのことを訊ねた時も、はぐらかそうとしていた。
そして極めつけが、四つめの花、チグジ……た、タイガーフラワー。
あの花の意味する願いはわからない。でも、花が増えたということはつまり、そういうこと。

わかってる。
言わなくちゃ。僕は、紅葉の幼馴染みなんだから。
「なにかいやなこと、あったの？」
僕はそう言って顔を上げたのに、紅葉はまだ俯いたままだった。自分の太ももをじっと見つめながら、ぼんやりと指をいじくっている。
だから僕は紅葉に一歩にじり寄って、さらに続けた。
「困ってるなら言ってよ。口に出さなきゃ、わかんないだろ」
それでも紅葉は顔を上げようとはしなかった。長い後ろ髪が、全て前に垂れ下がっている。僕は返事をしない紅葉に苛立ちを覚えて、勢いでその黒髪をかき上げてしまった。
「僕は」幼馴染みだろってそう言おうとしたのに、突然顔を上げた紅葉を見た僕は、声が途中でつっかえてしまった。
「紅葉……」
泣いていた。
僕がかき上げた髪の下で、紅葉は涙を流してた。今も服の裾で目元を何度もこすりながら、必死に僕から顔を逸らそうとしている。
「あ、あれ、お、おかしいなっ、目にゴミが入っちゃって……その、えっと、ごめんっ」
紅葉はベッドから立ち上がって、足早に部屋の扉まで向かっていく。
「待って！」
僕は身体だけでなく手まで伸ばして、紅葉の足首を掴んだ。腕を掴もうとしたのに、距離が足りなかったのだ。
「いやなこと、あるんだろ？　なら僕に相談しろ、今すぐ、ここで！」
紅葉の目を直視できなかった。僕が床にへばりついていたらお互い目が合うことなんてないから、むしろ好都合な姿勢だった。
だから僕は、そんな滑稽な姿勢のまま、紅葉の言葉が降ってくるのを待っている。

ぽたり、と。
僕の腕に、雨が落ちてきた。
「どうして、どうして今になってそういうこと言うの？」
雨は、止まない。
「いまさら、頼ってとか、相談しろとか、ほんと、意味分かんない。もう決めてたのに。誰にも言わないって、決めてたのに、ナツキが、ナツキが」
「ごめん」
「謝らないでよ！」
僕の口をついて出てきた謝罪に、紅葉は大きな声で言い返した。
「わたしが、言わないって……みんなに、迷惑がかかるからって、ずっと言わなかったのは、わたしだから」
知ってたよ。なのに、ずっと黙っててごめん。
僕は紅葉の足首から手を放して、立ち上がった。まだ、紅葉は俯いていた。
「なのに、いまさら、そんなの……やめてよ、せっかく、覚悟してたのに」
「紅葉」
紅葉の肩にそっと手を置いた。こうすると、僕のほうが紅葉よりもずっと背が高いことをしみじみと実感できた。だから僕は、中腰になって、できるかぎり紅葉の顔と同じ位置に頭を下げた。
「僕に教えて欲しい。それで、困ってることがあるなら、僕も、その、がんばるから」
それが僕の、精一杯の気持ちだった。
もう彼女を一人にしたくない。もう彼女を悲しませたくない。
この気持ちを自覚するまで、僕はあまりに鈍足だった。恥ずかしがって紅葉のことを真っ直ぐ見つめようとせず、そのままだらだらと今までを過ごしてきた。
でも、違うんだ。
僕はやっと、言葉にできた。

紅葉を助けたいって。
そう、言えた。
やっと、言えたのに。
「もう、遅いよ」
「えっ」
紅葉の冷え切った一言は鋭利な刃物となって、僕の胸に深く突き刺さった。
意味を判じかねた僕は、ただ機械のように繰り返すことしかできなかった。
「遅いって、どういうこと？」
「そのまんまの意味」
答える紅葉は、笑っていた。
僕に気を使ったのかもしれない。すべてをあきらめてしまったのかもしれない。
どちらであれ、風前の灯とも見えるその笑顔の端を、一筋の涙が伝って落ちた。
「わたし、逮捕されちゃうんだ。もう、みんなと会えなくなっちゃった」
そうして。
結局最後まで、紅葉は僕に助けてとは言わなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5720z/

トリガー・フラワー

2011年12月19日02時50分発行